吉田松陰の地理学研究

浜　田　清　吉

目　次

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　兵用地理学期（修学・兵学者時代）
1.　家庭と時代
2.　地理学への関心と兵用地理学
3.　時局的・社会的開眼
Ⅲ　日本地政学前期（周遊・幽囚時代）
1.　国内周遊
2.　江戸での修行と脱皮
3.　地政学的指向
Ⅵ　日本地政学後期―平和的地政学胚胎期（独座・苦闘時代）
1.　弾力性のある時務論
2.　多元的な国家観・民族観
3.　平和的な地政学観の意義
Ⅴ　松陰における地理学研究
1.　地理学研究の目的
2.　地理学観
3.　地理学の研究法
4.　教育における地理学と地図
Ⅵ　おわりに

Ⅰ　はじめに

吉田松陰に「地を離れて人なく，人を離れて事なし。故に人事を論ぜんと欲

せば，先ず地理を観よ」（幽囚録）[1] という名詩句があり，早くから内外に著明である。内村鑑三は1894年『地理学考』（後に地人論と改題）に引用し，牧口常三郎は1903年『人生地理学』の巻末にも引いて結びとしている。小牧実繁も1940年『日本地政学宣言』の幕末志士と日本地政学の項で，松陰先生曰くとしてやはりこの詩句を記している。さらに中国の王金紱も1929年『中国経済地理』上冊の引言（序文）冒頭に，「日本吉田松陰謂，地不離人，人不離事，欲論人事，必先知地理」と，この詩句を引用[2] したのである。

松陰の地理学については，わが国の地理学界においても，岩根保重の「近世日本地理学史序説」[3]（1936）の中で地理学研究のことがふれられ，辻田右左男の「吉田松陰と国防地理学」[4]（1940）においては，国防地理学の先駆者として，はじめて詳論されている。また鮎沢信太郎は『鎖国時代の世界地理学』[5]（1948）の中の「吉田松陰の世界地理研究」（1941）で，松陰の読んだおもな世界地理書を中心に，松陰の地理学研究を詳説している。さきの岩根保重はさらに戦後の1960年「吉田松陰の地理学観」[6] をかいて，地理学観を中心に松陰の地理学を論述している。以上が松陰の地理学についてのおもな論著であるが，いずれも吉田松陰における地理学研究とその意義を問題としており，それぞれの時代を背景とした特色もあり優れた研究である。

吉田松陰は，兵学者たらんとする修学の中で，地理の重要性を早く感じとっ

注１）　大和書房（1972—1974）『吉田松陰全集第２巻』による。以下特に記するもののほか全集はこれによる。（以下全集と略称）ただ原意をそこねないように，いくらか新しい国語表記にした。

２）　辻田右左男（注４）は註で［壬金玻「中国経済地理」序文第一句に「日本吉田松陰先生曰」としてこの言葉が記されている］とし，岩根保重（注６）は，［中国人の壬金玻の「中国経済地理」の序文の中に「日本吉田松陰先生曰」として記載されている］としている。何れも発刊年や発行所がない。この王金紱の『中国経済地理』の上冊は民国18年，下冊は19年，北平の文化学社印行である。

３）　岩根保重(1936)「近世地理学史序説」「地理学論叢第８輯」(石橋博士記念論文集)

４）　辻田右左男（1940）「吉田松陰と国防地理学」「地理論叢第11輯」（2600年記念号）

５）　鮎沢信太郎(1941)「吉田松陰の世界地理研究」『鎖国時代の世界地理学』(1948)原書房

６）　岩根保重（1960）「吉田松陰の地理学観」「山口県地方史研究第４号」　著者は1947年以来山口市に在住，筆者との交流のあった時期の論文。近世地理学史専攻者として主体性の高いものである。

たと思われる。その地理的関心は，社会的政治的開眼にもかかわらず，国土国情の理解や世界情勢の洞察，ひいてはその論策や行動にも影響しているようにも思われる。しかし，松陰は地理学者ではない。よく地理学の本質をわきまえ地理に多くのものを学び，大きくそれを活用した有能な実践者である。地理学が地理学にとどまらず，現勢を知り未来を察する実践的な地理的政策論として生かされたところに，松陰における地理学研究の意義と特色がある。いわば幕末における優れた日本地政学者であったといってよかろう。ただそれも，地理学についてまとまった論説に接することはできず，多くの兵学的・政策論的著作や日記・書簡などに散見する短文片言よりの推定が許されるのみ，という事情にある。

従って，吉田松陰における地理学の取扱いと評価は著しく困難であって，生々発動やむことなき松陰30年の生涯の中で，いかに地理の学修が行われ，その地理学観が形成し進展したか，さらに地理学的識見がどのように思想の形成や政策と教育に生かされたかなどが，慎重に追求されなければならない。その意味においてここでも，松陰の地理的意識・地理学観の形成をその生活史の中でできるだけ発展の相において全体の分節としてとらえるよう努めたいと思う。

Ⅱ　兵用地理学期（修学・兵学者時代）

1.　家庭と時代

松陰は1830年（天保元年）萩の東郊松本村，護国山の西南麓団子岩に生れた。萩城下を眼下におさめ，日本海を見渡す景勝の地にあった杉家―農家的で小禄な藩士の，困苦にみちた大家族生活の中で生いたった。しかも幼少にして山鹿流兵学師範吉田大助のあとをつぎ，兵学者として藩主に仕える運命をにない，家庭にあって父百合之助と叔父玉木文之進による真剣な厳しい早教育[1]を

注７）　上記の３）４）５）については，以下これらの論文より引用するものは特別の場合のほか注は省略する。

１）　徳富猪一郎（1893）『吉田松陰』民友社や，玖村敏雄（1936）『吉田松陰』岩波書店によって早くより取り上げられた。

うけた。この父と叔父の至誠と情熱による初発の庭訓で，愛国の至情や尊皇の精神は，感覚的・観念的とはいえ，強く脳りに焼きつけられたとみられる。しかも，法をも超えてした猛進の行動をも，最後まで信頼をもってみまもった家族親族の存在と，農耕の場をも教育の場とした，生きるための真剣な生産労働の雰囲気の中での勉学は，松陰の生涯を考える上で重要な条件をなすものと考えられる。純一至誠の憂国の志士松陰は，先ず第一に「家庭の子」であった。

これとともに，そのおかれた時代相が問題である。長州藩でも財政難のゆえ「倹政」の布令が続けられ，松陰２才の年には藩の全土に及ぶ大一揆が起っており，城下の生活も困難をきわめたのである。そのような情況の中で，７人兄妹の次男として貧苦の中に生いたった松陰である。おとなしく親切で身なりなど気にしない好学の英才[2]に，こうした生活環境が深い印銘を与えないではいなかったであろう。松陰幼少の1830年代のなかばは，全国的にもいわゆる天保の大飢饉で，おびただしい百姓一揆が起り，幕府も天保の改革を強行せざるを得なかった。やがて欧夷と呼ばれた西洋の帝国主義的勢力は東亜にも及び，わが国の平和がおびやかされるに至り，それへの対応が焦眉の急となったのである。政治とも深くかかわる兵学に精進する若き兵学師範に，時代は鋭い対応をせまったはずで，松陰はゆれる長州に育ち，その進路に苦慮する小国日本を思う「時代の子」[3]として脱皮成長するのである。

なお松陰の時代が近世末期で，西洋の学術を学びはじめたとはいえ，鎖国300年が大きく響き，西洋の地理学とその背景をなす学術の世界からは，著しくかけ離れ，とり残された近世日本の地理学界であったことに注意せねばならない。

注２）　児玉芳子（妹千代）（1913）「家庭の人としての吉田松陰」『全集第10巻』

３）　奈良本辰也（1951）『吉田松陰』岩波新書　この巻頭に「時代の子」として，日本における時代的背景がくわしく扱われている。なお辻田論文の中で『日本教育資料』によって，「萩明倫館は明治維新前に於てその教授科目として地理が掲げられていた日本唯一の藩学校であったが，松陰の地理学研究，松下村塾における地理教育等を考え合すれば，その事実にも何か吉田松陰の影響がなかったかと一応疑問を持つことができる」と述べている。それはともあれ，明倫館に象徴される長州藩の学術文化に対する積極性進取性は，「日本の中の長州」という松陰の環境として重要である。

松陰の生れた1830年は，パリー地理学協会・ベルリン地理学協会に続くロンドン王立地理学協会の創立された年であり，カール・リッター（K.Ritter 1779—1859）がベルリン大学地理学教授になったのも，既に松陰誕生の10年前であったのである。このように西洋の科学技術との落差の大きな日本の封建社会における松陰であったのである。こうした面での「時代の子」でもあったことを見のがしてはならない。

2.　地理学への関心と兵用地理学

兵学が土地の形勢，地の利を重視するのは当然で，孫子の「地形篇」や「九地篇」[4] にふれるまでもなく，早くより地形・地理に関心を深めたことは自然である。しかも朝夕城下を中心とする大地理風景を見おろし，気候風土に鋭敏に対応する農家的武士家庭にあっては，早く「俯してもって地理を察する」[5] 心得を身につけ，生活と風土とのかかわりに注目する可能性が大きかったと思われる。しかも後年，家兄梅太郎に対して，弁明の意味でもあろうが「地理学は弟篤く好み，且つ其の才ある方に御座候。因って色々の本を見たがるに御座候」[6] と，多くの書籍を頼む手紙を届けた松陰のこと故，地理学への関心は早く深かったものと推察できる。

さて，松陰の初期における地理学観を最もよく物語るものとして，1846年17才夏の「防長地図に題す」[7] という文章がある。「余，平生地理にくらきを憂う。この頃長防地図を得て朝夕細かに観る」にはじまり，読図の内容を語り「余初め之れを見，長防の地志を撰ばんと欲す。然れども現に其の地を経ず，故にたとえば夢を説くが如し。故に半塗にして廃す。それ地理の学係る所のものは甚だ偉なり。政を布く者は地理の宜しき所に因り，兵を用うる者は地利の

注4）　孫子評註（1857）『全集第5巻』

5）　易経繫辞篇に「仰以観干天文　俯以察干地理　是故知幽明故」とあり，中国における地理という語の初出とされている。

6）　1854年11月27日，野山獄から兄梅太郎宛に，多数の本のさし入れなどを頼んだ書簡の中のことば。

7）　「防長地図に題す」（1846）『全集第6巻』の「詩文拾遺」の中にある。稀にみるまとまった地理学的文章。

便なる所に依る。故に治にして政を布く者，乱にして兵を用うる者皆宜しく諳(そら)んずべき所なり。禹貢の地理に審(つまびら)かなる，其の旨深し」と記している。地理の学が空間科学であって，その表現形式としての地図の意義をよくわきまえており，しかもこれに触発されて長州藩土たる長門・周防の地誌を撰述しようと考え，しかもそれが，精細な現地踏査を必須とする実証的なしごとであるという学術的考慮によって中止しているのである。松陰の地理的識見は既にして高く，行政にも用兵にも地理が必要であることを理解した上で，地理学のかかわる所は甚だ偉なりとうたいあげたわけである。中国初の合理的地誌と評される『書経』夏書の一篇である禹貢を傍証にあげるなど，中国の学識に裏づけられた言説であることをも示している。なお地利の語はしばしば使われるが松陰の地理学観の実学的な立場を示す重要な表現と思われる。藩命による20才夏の北浦海岸巡視の記録「廻浦紀略」[8] には地形の語が多く，地形の利とも使っているし，野波瀬で地蔵崎に「登りて遠望」し，青海島の「高山の絶頂に登り四方を眺望」するなど地形を相し地理を察することに努めている。また同じ北浦巡視の「廻浦存稿」[9] には「要は行止形勢，利害消息，遠近険易，水涸山阻の地利を詳審せんのみ」と見えているから，この時期の地理の内容は地形地理の利を主としたものと解してよかろう。また夏に「防長地図に題す」をかいた17才の春「海国兵談跋」[10] をかいているが，その中に「ついに学校の制，君将の道地利の概を言う。子平人となり武を好み，敝衣粗食して以て其の身を習わし，遠近に遊歴して以て地利を察(あきら)かにす」と記しているから，林子平の地利思想の影響も受けたかと思われる。

さらに松陰は20才の春，藩命をうけて外寇御手当方に提出した「水陸戦略」[11] においても，はじめ「御両国中御手広き事にて地理等も兼て詮議仕り居らず候

注8）「廻浦紀略」（1849）『全集第9巻』

9）「廻浦存稿」（1849）上に同じ北浦巡視の時かいた「同研の諸兄に与う」という短文で『全集第1巻』の「未忍焚稿」の中にある。

10）「海国兵談跋」（1846）『全集第1巻』「未忍焚稿」の中にある。海国兵談は幕府に問題にされた書，林子平刑死の前年—1791年刊。

11）「水陸戦略」（1849）『全集第1巻』上書の中に含まれている。

えども」としながらも，主意の第1項で「本藩の儀は三面海を引受け，殊に西北辺は島嶼の障りもこれなく，賊衝に当り候えば，山陽諸国の中にも取分け防禦肝要の儀と存じ奉り候」とし，総論の第1項でも「用兵の法あらかじめ地理をわきまえず候ては，戦略も語るべき様これなく候」と述べている。これが兵学師範として，下命による上書である点からも，この時期の地理研究の主眼が兵学的な地理学観によるいわば兵用地理学と称すべきものであったとしてよいであろう。

3.　時局的・社会的開眼

地形地理主体の兵用地理学研究期とはいえ，時代の急潮は，感受性にとむ松陰をゆさぶるのであった。年少の頃から指導を受け，自ら「僕少小にして門下に親炙し，片言隻語未だ嘗て正を先生に取らざるなし。先生亦傾倒してのこす所なし」[12]と述懐している山田宇右衛門（治心気斎）が，1845年江戸から求めてきた『坤輿国識』正篇3冊を16才の松陰に贈ったのである。この書は当時最もひろく読まれた最新の優れた世界地理書であり，しかも弘化2年初版本であった。そして山田は「世変近きにあり，屑々稿簡を執り，詩書鉛槧を事として空言を放ち，悠々歳月を徒過するは腐儒の事のみ，汝何ぞ活眼を開き宇内の形勢を探究し，天下の推移を達観せざるや」と激励したといわれる。またこの年長沼流兵学の兼修も志ざし，山田亦介（含章斎）に師事するが，養父の盟友でもあった亦介もまた，情熱をかけて指導に当り「欧夷日に盛んにして連りに東海諸国を侵略し，其の害毒今や皇国に及ばんとしつつある。汝年少なりと雖も異材なり。宜しく勉励して非常の功を建て名を海外に顕出すべきである」と鼓舞した。これら両師の激励鼓舞によって松陰は感動し，蒙をひらかれ，専心学修につとめ[13]，時局に対し，世界の情勢に対して大いなる開眼をすることとな

注12）　「治心気斎先生に与うる書」（1856）『全集第2巻』丙辰幽室文稿の中にある。

13）　岩根保重（注6）は両山田の鼓舞激励の言葉をあげてこれを重視し，松陰の学修ぶりについても，丙午すなわち弘化3年に山田亦介所蔵本による旨付記した「輿地誌略抄」が「未忍焚稿」中におさめられていることや，同じく「弘化丙午矩方写す」の奥書のある「華夷一覧図説」なる写本が萩の松陰神社に残っていることも述べている。なお，「輿地誌略」（1826）は青地林宗の作，「華夷一覧図」（1302）は山村昌永の撰である。

った。注目すべき転機である。

他面1846年の「松村文祥に送る序」[14]の中で見るように「蓋(けだ)し士たる者は禄を公上に食(は)み，耕さずして粒米以て腹を充(み)たすに足(た)り，織らずして布帛以て身を蔽うに足る。故に生れては則ち逸し，また憂勤の心あるなし。是れ其の道に精なる能わざるゆえんなり。彼の農工商賈は則ち然らず。一たび其の業をおとさば，則ち仰ぎては父母につかうるなく，俯しては以て妻子をやしなうなし。故に其のこれを為すや志を致す。これ能く其の業を成すゆえんなり」の如く，士農工商の実情に深い注意をはらったりもして，民生へも熱い思いをよせ，社会的開眼をはじめるのである。玉木文之進の松下村塾における同学の友に送ることばの一部とはいえ，こうした人間的成長は，けだし将来に続くものとして注目に値すると思われる。しかも既にして多面的に生々発動する松陰において「兵用地理学期」などと単一化した表現をすることの無理を思わせている。

Ⅲ　日本地政学期前（周遊・幽囚時代）

1.　国内周遊

松陰の周遊は，20才夏の下命による北浦海岸巡視はともかく，本格的には21才夏，兵学修行をめざして「発動の機は周遊の益なり」として，積極的に求めた鎮西旅行にはじまる。平戸での兵学精進のほか，長崎における海外情報や時勢の波動に接触しての日本的世界的啓蒙をうけたのはもとより，道中における西国の地理民生の直接の見聞も，若い松陰の思想や行動に強い影響をもたらさずにはおかなかった。

松陰の地理を語る際にも，その西遊日記の道中の観察と記録が，地理学的であると早くより指摘されてきている。「秋吉台を過るに到る所畠作の物を見るに，甚だ不景気なり。蕎麦を最とす，其他吉貝牛蒡羅蔔の類皆然り，稲作は却て可なり」[1]の所である。ただこの旅に先だって松陰は門人をつれて萩城下東

注14）「松村文祥を送る序」(1846)『全集第1巻』の「未忍焚稿」におさめられている。

1）『西遊日記』(1850)岩波書店(定本版)『吉田松陰全集』(1935) 第7巻による。辻田

郊の羽賀台（玄武岩台地）で演習をしていることを思うと，赤間ケ関街道の長登から三角原―呼音台すじの秋吉台（石灰岩台地）の凹地や灰白の露岩などの特異な地形にふれていないのが，鋭敏な兵学者松陰だけにいささか不思議である。当時の関心のそとにあったためかも知れない。ともあれ，東遊日記の「姫路以東山漸く遠く地漸くひろく，平田漫々菜麦青黄，すなわち帝京の遠からざるを知るなり」[2] と共に，松陰の地理的識見の非凡さを示すものとしてしばしば引用されている。観察も推論も正しく，記述もまた簡明正確である。土地の人からの聞き込みを記す場合も，その真偽をよく検討しており，疑わしい場合などは，その旨を注記するという用意もあったほどで，旅行記ながら地理学的価値も高いものといえる。あえて亡命し日本的開眼の実を示した東北旅行の記録である東北遊日記[3] について見ても，佐渡の金山の実情や津軽・南部などでの政治や民生の考察批判などにも，本来兵学の根本義とはいえ経世済民的視覚の鋭さが目だってきて，官民間の矛盾などにも着目している。経済・社会・政治への視野が拡大した証であり，同時に北日本の認識や北辺防備への関心の高まりが推察できる。

脱藩亡命の北国の旅のあと，浪人の身となった松陰は，藩主毛利敬親の恩寵と深慮により，10年間の周遊修行が可能となり諸国遊歴の旅に出る。瀬戸内海を渡り四国を巡歴して紀伊・大和・伊勢を経て中山道をたどることおよそ半年その間自らなる地理的知見をもひろめている。その他江戸にあっても，米艦がくれば浦賀にとび，露艦を求めて長崎に往来するなど国土巡検の機会をしばしばもったのである。

2.　江戸での修行と脱皮

松陰22才初の江戸入りは，江戸城下に集中している優れた人材や諸情報への

・岩根もこの全集によっている。岩波の普及版（1939）と大和書房版には「秋吉台を過るに」が除かれている。定本版でも傍線をひいて問題視しているが，強行的な日程であり，やはり赤間関街道を急いだと思われる。従って「秋吉台を過る」にを生かすのが実際的であろう。

注２）　「東遊日記」（1851）『全集第９巻』

３）　「東北遊日記」（1852）『全集第９巻』

接触ということであった。強烈な刺戟のもと勉学修行も猛烈を極め，地理学についても読書や地図集めのほか，急を告げる国家防衛海岸防備への対応で，実地の見聞踏査も行われた。そうして「将及私言」や「海戦策」などが積極果敢に上書され，「普天の下王土に非ざるはなく，率海の浜王臣に非ざるはなし。……天下は天朝の天下にして，乃ち天下の天下なり，幕府の私有に非ず。……」[4] といった皇国観を示し，外力防衛について「然れども用兵に最も関係するものは地形にしくはなし。今地形は吾に其の利を得たり……」[5] と古式ながら積極的海防を論じたりしている。世界的視野をもつ先覚佐久間象山への傾倒共鳴も大きく，海外の直接経験の緊要なることを自ら行動で示すに至り，特にアメリカとロシアの二大国に注目したものの如く，長崎に露艦を追い，下田に米艦を訪ねたのである。

当時の松陰の地理学観は，兵用地理学をはるかに超しており，人事百般とくに時務としての国防と世界認識，さらに皇国日本の針路探求のための基礎学としての地理学を考えるに至ったと思われる。下田踏海前，同行を約した従僕金子重輔の求めに応じて与えた言葉，すでに掲げた「離地而無人　離人而無事　故欲論人事　先観於地理」がそれを示している。後に松陰自身が講孟餘話に「学業の次序を語った」この言葉を「生の亡後，余是れを其の行状に著わす。友人土屋松如称して名言とす。今この章を読むに，孟子すでに余に先だって是れをいう」[6] と謙虚に記している。松陰独特の表現ではあるものの，中国に系譜をもつ地理学観であることを示すといってよかろう。

3.　地政学的指向

下田踏海の失敗とその責による野山獄幽囚は，松陰を隔絶極小の環境におくが，随処主となる純一懸命な松陰は，猛然と読書や執筆に励み，同囚の教化と放免に献身してやまぬのである。松陰25才，野山獄での最初の著作『幽囚録』[7]

注4）「将及私言」（1853）『全集第2巻』

5）「海戦策」（1854）『全集第2巻』

6）「講孟餘話」（1856）『全集第3巻』金子重輔の亡後その行状記（「幽囚録」におさめる）に書いたことを示す。この章とは第28章。

7）「幽囚録」（1854）『全集第2巻』萩野山獄にての執筆。

には「然らば則ち吾れの海に航せしこと，あに已むを得んや」とした下田踏海にいたる事情や背景などが詳説され，その中に松陰の地理的知見が政策論として展開される姿もうかがわれ，直情的ないわゆる日本地政学的立論が目だつのである。「余，平象山に師事し，深く其の持論に服し，事ごとに決を取る」と書いた松陰は，佐久間象山の影響のもと飛躍的に世界への関心を高め，祖国のあり方を凝視したと思われる。地政学的に下田と横浜を対比して立論した象山の横浜互市場の説をくわしく記し，象山の購艦の説を知って「予が航海の志実に此に決す」と書き，踏海の行動が世界の中の日本の歩むべき道を求めた地政学的識見に裏づけられたものであったことを推察させる。そうして，周遊・修行の自発的行動で得たものが，幽囚独座の小世界で許された文章と言辞の形で激しく噴きだすのである。それは幽囚録ばかりでなく，獄舎問答や講孟餘話にも及んで，激しい侵略的な論調が，各所に展開されるのである。しかしこれと共に，道義や平和が説かれ，善隣友好・国際平和への思想もまたうかがえるのである。幽囚の年を重ねての極限状態における心理の作用もあるか，矛盾するかにみえる言辞がほとんど同じ時に表出されている場合も少くない。

さて，講孟餘話では，孫子の九地篇から「率然は常山の蛇なり。其の首を撃てば則ち尾至り，其の尾を撃てば則ち首至り，其の中を撃てば則ち首尾ともに至る」を引用して，わが国土神州を「是れ常山の蛇に非ずや」とたとえる。そうして「蓋し畿内は六合の中心にして萬国の仰望する所，皇京の基，萬世かわることなし。故にわれ嘗って之が策をなして曰く，京を去ること近くして地の便をなすもの伏見に若(し)くはなし，宜しく大城を起して幕府となし皇京を守るべし」「かの武蔵の専ら海を一面に受け三面皆山にして，一たび賊の為めに海を扼(やく)せられなば，海運為に絶ゆるが如きにいたるなり」といい，さらに「近世輿地を論ずる者或は曰く」として，山東（関東）にあらずんば以て天下を制するなしという説を否定している。なお「諸道の侯伯，京師に朝し幕府に覲するに皆船艦を用いて海路よりせば，則ち将士は海勢に習い，船具は虚套なく，緩急も用を為すに足らん。且つ諸道盛んに船艦を造らば……」とのべ，「以て京師を護り幕府を衒(まも)り，一旦外征には則ち数十の軍艦檄(げき)に応じてたちどころに艤(よそおい)し

其の便以て尚うるものなし」と論じたりしている。地政学的色彩のつよい立論といってよかろう。

さらに海外からの圧力「洋賊」への対応については，衆知のように，世界地理の知識の上に皇国の積極的防衛の論策が述べられている。かの幽囚録において，アメリカやロシアまたオーストラリアに就いて適確に詳論したのち，「凡そ萬国の我れを環繞するもの，其の勢正にかくの如し」と述べ，遠く離れたヨーロッパさえ「我れまた以て患と為す」の条理を述べ「遠きこと欧羅巴の如きもなお比隣の如し」と論じている。同時にまた「然りといえども是れただ傳聞の得たる所，文書の記す所然りと為すのみ。其の果して然るや否や，遂に未だ知るべからざるなり。いずくんぞ俊才を得て海外に遣わし，親しく其の形勢の沿革，船路の通塞を察するにしかんや」と主張している。

また「今急に武備を修め，艦ほぼ具わり礮ほぼたらば，則ち宜しく蝦夷を開墾して諸侯を封建し，間に乗じて加摸察加・奥都加を奪い，琉球を諭し，朝覲合同すること内諸侯とひとしからめ，朝鮮を責めて質を納れ貢を奉ること古の盛時の如くならしめ，北は満洲の地を割き，南は台湾・呂宋の諸島を収め，漸に進取の勢を示すべし。然る後民を愛し士を養い慎みて辺圉を守らば則ち善く国を保つというべし。然らずして群夷争聚の中に座し，能く足を挙げ手を揺すことなく，しかも国の替えざるもの其れ幾くなるか」と，激しい侵略的言辞を綴っているのである。幽囚の極限された観念の世界から，警世の気慨を示し積極的な国防論を打ち出した日本地政学前期を特徴づける代表的言論の一部である。

Ⅳ　日本地政学後期―平和的地政学観胚胎期（独座・苦闘時代）

松陰は野山獄・杉家幽室松下村塾の時代に，萩を訪れた僧月性や黙霖と相識り文通し，また長州藩の老儒山縣太華との論争もあり，直接間接に多くの影響触発を受け，あくなき読書と思索，教育の諸体験と相まって，その思想は流動変成されていったと思われる。地理的思想もまた広くなり次元も高まって，自

他の民族国家の存在と，その間の秩序に着目するようになり，いわば平和的・共存的な地政学観が，胚胎成長してきたかに見うけられるのである。少くともそうした方向へ発展する可能性を強めたといってよかろう。

1.　弾力性のある時務論

松陰はすでに，「野山獄に在りて，同囚と口に委せて問答せしことを，筆に委せて記し置きぬ」（1845）という『獄舎問答』[1] で「天下に機あり，務あり。機を知らざれば務を知ること能わず。時務を知らざるは俊傑に非ず。今すでに天下の大機を失う。まさに砲を溶して鋤（すき）となすべき時なり。然るになお株（しゅ）を守りて砲艦を急務と思うは，虚気の甚しきに非ずや」と答えている。また「予もまた曽（かつ）てほぼ兵法を学ぶ。戦勝攻守の術もとより心をつくす所なり。西洋夷と兵を交うる如きは，十年外にあらざれば決してこの事なし。其の節，前に云々する如し。然れども国内の乱の如きは実に一日忘るべからざる所なり。然れども砲よりも艦よりも善きものは兵機をわきまえたる士なり」と答えたりする明をも，当時のいわゆる侵略的言辞とともに示している。また松陰の真実を物語るものとすべきであろう。

さらに進んで「余が策する所は武備の冗費を省き，膏沢を民に下さんとなり。四窮無告の者は王政の先にするところ，西洋夷さえ貧院・病院・幼院・聾唖院等を設け，匹夫匹婦もそのところを得ざる者なき如くす。いわんや我が神国の御宝にして犬馬土芥の如くにして可ならんや。また隣国の流民この国に来る者あらば，人として本土を離るべからざるゆえんを暁喩し，路費を与えて還すべし。もし深くわが化を慕いて去ることを欲せざる者あらば，為に一村落を開き田産を与えこれを置き，もっとも三年或は五年の復除（免税）を賜うべしもし田地少く人民衆（おお）きに苦しむ時は，或は塗布・番匠・鍛冶等の諸工作をなし硝石・漆・油・蠟・紙・諸薬物等を製造せしめ国用に供し，餘りあるものは他国へ売り出すもまた禁ずることなくし，専ら下を利するを務めて上を利するを務めず。かくの如くなれば民富みかつ庶（しょ）にして，国したがって旺盛す」とまで

注１）　「獄舎問答」（1855）『全集第２巻』の野山雑著に含まれている。

説き及んでいるのである。国際的視野もひらけ，経済交易の本義も心得，民生にも配慮した平和的民主的立論で，みごとな進取的経世済民のことばとしてよいと思われる。

2.　多元的な国家観・民族観

松陰は『講孟餘話』[2] の「独同の義」の解説で「皇国の君臣を漢土の君臣と同一に論ずるは，余の萬々服せざるところなり」と，暗に山縣太華の論を批判し「大抵五大洲公共の道あり，各一洲公共の道あり，皇国・漢土・諸属国公共の道あり，六十六国公共の道あり，皆いわゆる同なり。その独に至りては一家の道隣家に異り，一村一郡の道隣村隣郡に異り，一国の道隣国に異るものあり。故に一家にて庭訓を守り，一村一郡にては村郡の古風を存し，一国に居りては国法を奉じ，皇国に居りては皇国の国体を仰ぐ。然るのち漢土聖人の道をも学ぶべし。天竺釋氏の教をも問うべし」と論じ，「漢土は実に日本と風気相近ければ，道も大いに同じ。ただ欧羅巴（ヨーロッパ）・米利堅（アメリカ）・利未亜（リビア）諸州に至りては，土地隔遠にて風気通ぜざる故にや，人倫の大道さえもその義を失うことあり。いわんやその他の小道においておや。しかれども彼に在りてはまた自ら視て以て正道とす。彼の道を改めて我が道に従わせがたきは，なお吾の萬々彼の道に従うべからざるが如し。しかるに強いて天地間一理というとも，実事において不通というべし。独同の義を以てこれを推究すべし」と断じている。この認識この立論の基礎に，地上に固有の地理的相違に応じた民生・社会・国情・民族性の相違を認めている点で，多分に松陰の世界地理研究[3] が生かされ，地理学的な解釈に裏づけられていることを思わせる。また諸国家，諸民族共存共和を認めようとする積極的な姿勢は注目に値すると思う。

3.　平和的な地政学観の意義

庭訓と家学の中にいち早く芽ばえた天朝への忠誠は，山鹿素行に学ぶ神国観

注2）　「講孟餘話」（1856）『全集第3巻』

3）　鮎沢信太郎（注4）は松陰が愛読した上，講義にも使った「坤輿図識」をはじめ，「八紘通誌」・「夢の城」・「海国兵談」・「訂正増譯采覧異言」・「魯西亜本紀」・「職方外記」・「海国図誌」・「地学正宗」ほか多数をあげ，松陰の世界地理研究と関係づけて評釈している。

や水戸学に動かされた皇国史観に発展するが，地理学精神ともかかわる独同の義の解釈などを経て，客観性を高めた民族国家論に成長したかにみえる。また攘夷論も強圧的外夷に対する国民的気概としての色彩がつよく，松陰の時務認識，世界情勢観からは，基本姿勢はむしろ主体的な開国論であったと見られる。

松陰が兵学修業の中で得た時務の洞察力と愛国の純情は，22才で兵学師範をなげうち脱藩し，浪人の自由を得て天下の事に命をかけるが，なお幕府の存在を認め，その強化によって国家を守ろうとし公武合体をも考えた。至誠にして動かざるものなしの信念で猛挙を重ね，果敢な上書を続け諫死の理念に徹するが，現実の政治の世界は，松陰の前に大きな壁としてそびえ立つのである。そうして，勇敢な侵略的言辞はかげをひそめるとともに，ついに行動的な倒幕論となり，草莽崛起に期待し，諸侯もたのむにたらず，天朝も要(い)らぬというように，求心的かつ革命的に突き進むに至るのである。

ふりかえって概観したような，生々流動し尖鋭化する松陰の思想と行動の推移の中で，地理学から注目される地政学的思想の展開は，すでに述べてきたように，振幅が大きく侵略的言辞と平和的言辞が共存したりしてとらえがたい。矛盾とも見えるそれらのすべてが，率直な松陰の言辞であり思想であって，表裏左右の両面両側を動的に，しかも一元的にとらえることが肝要である。その意味で池田論が『吉田松陰』[4] で「平和国家のビジョン」の項をたて，松陰の道義国家・平和国家論的言辞に光をあて，その面を強調したことは観かたが新鮮であり，おきざりにされていた面の発掘という点で高く評価できる。ただそれも「松陰はついに，平和国家・中立国家への道を構想するようになる」「彼は道義を基調にした平和国家の道をすでに百年前に構想していたのである」「今の平和憲法の先駆をなしていたというと，あまりに唐突な感じをうける者もいるかもしれないが決して唐突ではない」などとするのはいささか行きすぎであろう。この点で寺尾五郎が『革命家吉田松陰』[5] の「松陰における独立と

注4）　池田諭（1972）『吉田松陰』　大和書房
　5）　寺尾五郎（1973）『革命家吉田松陰』　徳間書店

侵略」の項で，松陰の侵略的言辞に解釈を与え，「一方において平和共存の構え」もあったことや「むしろアジア連帯への方向へ」指向したことを認めた上で，池田の上記のことばを引いて「とまで一面化してよいかどうか，これもまたひとつの行き過ぎになろう」としているのは正しい批判だと思われる。かくて松陰における地政学において，矛盾の合一ともいうべき世界のあるという点に特質を見出すのであって，一般に侵略的な面を浮きぼりにしてきた松陰の日本地政学は，平和的な地政学観をも胚胎共存するに至っていたのである。留意すべき重大な点と思われる。

V　松陰における地理学研究

吉田松陰の地理学を，その生涯を通じて発展の相において，あえて模式化してとらえ，兵用地理学期と日本地政学の前期と後期（平和的地政学観胚胎期）に区分して概観してきた。そして，日本地政学期の前期から後期への移行が，周遊から幽囚への転機を超えて漸移するし，後期の言説が侵略的平和的重層構造をなすなど，単純な処理をこばむもののあることは，すでに述べてきた通りである。ここでは総括の形で，幕末における地理学界を背景とした，松陰における地理学研究の目的と意義，地理学観，研究法および教育について考察し要約する。

1.　地理学研究の目的

松陰は家学である山鹿流兵学の修業者として孫子をはじめ，中国の兵法・兵用地誌の系譜をうけて地形の利を中心とした兵用地理学を修得したもので，それは兵学の手段としての地理研究であった。「題防長地図」の文を引用して述べたように防長地誌の撰述を志したことはあったが，遂に地理書・地図類を著作して地理学界にその業績をとどめることはなかった。その意味で地理学者の領域に入ることをせず，従って地理学者とはいい得ない。もちろん熱心に地理学を学び，それを兵学や時務論に適切に活用し，特に外圧を防ぎ，日本の進路諸国のあり方を考えるに当って，その生動する政治思想に相即して地理的政策

論を展開させた点からは，優れた地政学者であったといえるわけで，地理学界先学のほぼ等しく指摘したところである。

もとより松陰の時代は，近世日本地理学の成熟期であって，林子平・佐藤信淵[1] などの先駆的な地政学的論著に，或は学び或は触発されたところも多かったと思われる。ともあれ松陰は近世日本の地政学者の中の，最後の優れて実践的な地政学者であったのである。

2.　地理学観

最初にとりあげたように，松陰の地理学観は「地を離れて人なく，人を離れて事なし。故に人事を論ぜんと欲せば，先ず地理を観よ」に要約表現されている。この地人論的な地理思想の系譜は古く中国にさかのぼるにしても，この松陰の名詩句は，普遍化された表現であって，まさに古今東西に通ずる名言である。

日本近世地理学に明るかった岩根保重は，近代地理学創始者の一人カール・リッター(前出，Ⅱ－１)のことば「吾人の活動はあらゆる部分において環境の影響下にある。故に環境を知らずしてはその職分をつくすことはできないし，しかして環境を知るには地理学による必要がある」や，さらに地理学に新生面を開いたフリードリッヒ・ラッツェル（F. Ratsel 1844—1904）のことば「人は地上に生れて地上に住し，地の与うる富によって生き，死して骨を地中に埋める。故に地を離れて人は存在しない」を引いて「東西符節を合する如くであるが，地理学者ではないだけに松陰の卓見は称せらるべきものがあろう」と評価している。まことにその通りだと思われるし，リッターの没年はたまたま松陰刑死の年にも当たっている。

なお，松陰は地理学者でなかったにかかわらず，色々な点で地理学の本質を正しくはあくしていたことに触れねばならない。その一つは現地の踏査見聞を重視したことである。地理の研究が目的でなかっとしても，周遊巡検が積極的にもたれ，しかも重要な土地，新しい巡路を選んで行われていることは，地理

注１）　林子平（1786）『海国兵談』
　　佐藤信淵（1808）『西洋列国史のあとに付けた防海策』

学研究としても要を得たものである。その見聞も科学的といってよいほど鋭敏誠実であったことは既に指摘した通りである。ついには海外の実情はあくのため，あえて下田踏海のことに立ちいたったのも，この実証的な精神と深くかかわるものであったと推察される。また，17才の時の防長地誌撰述中止の理由が「然れども現に其の地を経ず，故にたとえば夢を説くが如し」にあったこと，従って地誌の本質ならびにその実証的な精神をはあくしていたことを見のがしてはならない。

さらに今一つ1851年家兄梅太郎に送った書簡[2]に「奥阿武郡行，妙々羨むべし羨むべし三千里外を知るも何の用かあらん，近く二邦の地理人情を精詳にすべし」と述べている。二邦はもとより長門・周防両国をさすが，地理の研究が郷土から始められ，近きより遠きに及ぼすべきであるとの地理学観によるものと思われ，先きの岩根保重も「これは当時輩出した地理学者の間にも見ることのできないところであった」と注目している。

終りになおつけ加えねばならないのは，やはり松陰の地理学に由来する「聴き込み」の問題である。例えば睡餘事録[3]の最後には「十一月廿三日越中富山の薬商の話を聞く」の書きだしで，富山・金沢・福井など北陸の諸都市の状況や，薬商人がいかなる土地を通って富山から防長へくるかの経路，大阪富山間の物資の輸送路などを，数値もまじえて詳細に記録している。まことに地理学者そのものの研究態度ともいえるものである。

3.　地理学の研究法

すでに地理学観に即して現地研究や，近きより遠きに及ぼす研究についてふれたが，書籍や地図などの文献による研究においても，批判的精神，客観性を重んずる態度に優れている。家兄梅太郎あての1851年江戸からの書簡[4]中の「伊豆七島図，現地を見候處，誠に虚妄の図に御座候」や，江戸の久保清太郎あての1855年野山獄からの書簡[5]で「地学正宗に日本民口一千五百万，江戸戸

注2）　兄杉梅太郎宛の書簡（1851年7月22日）『全集第7巻』
3）　「睡餘時録」（1852）『全集第9巻』
4）　兄杉梅太郎宛の書簡（1851年9月15日）『全集第7巻』
5）　久保清太郎宛の書簡（1855年9月26日）『全集第7巻』

数七十三万，民口一百万とあり，是は江戸と京との多寡にても信ずるに足らざる事明かなり」とあることは先学が早くより指摘したところである。伊豆七島図は，江戸で修学中の「費用録」[6]に「壹歩七島図，壹歩貳朱八紘通誌」「百文房州図」などと記録した比較的高価な買物に当るものである。また地学正宗は杉田玄瑞の翻訳した世界地理書で，鮎沢信太郎が「これは松陰の読んだ世界地理書中最も高級の地理書である」とし，岩根保重が「当時内容においてはすでに最新のものではなかったが，地理書としては権威あるものとして広く世に知られていたものである」と述べているものである。松陰の批判的精神を物語る好例というべきである。もとより講孟餘話の巻頭で「経書を読むの第一義は聖賢に阿(おもね)らぬこと要なり。若し少しにても阿る所あれば道明かならず，学ぶとも益なくして害あり」と言いきった松陰である。主体的批判的精神は，松陰の純粋で真剣な生活態度のなすところと思われる。

空間科学である地理学の研究に，地図が重視されたのは当然であるが，松陰の地図への関心は早くから深く，地図そのものの読解，地理書を読む際の利用はもとより，歴史書を読むにも地図を重視したことは衆知のことといってよい。1855年の『清国感豊乱記』[7]の巻頭には地図を載せ，例言の中に「此の記を読むもの，其の地理を按じて初めて清国の一大変乱たるを知る。因って初めに二京十八省の略図を置く，読む者幸に一々是れを対照せよ」といっている。また下田踏海の際も地図を携帯しており，それは鮎沢信太郎によると「永島三平が，まさにアメリカに渡ろうとした松陰にはなむけとした『新製輿地図』一軸は箕作玉海の作であったろう」とされるもので，1844年箕作省吾撰述の権威ある『新製輿地全図』であった。

ただ，国防を考えるなどにあたって，宇内の形勢，ワシントンやロシア，ヨーロッパやオーストラリアの位置や距離を問題にする場合にも，地球儀を使用した記録は見えないようである。当時は求めんとしても容易に得がたかっただろうと思われる。また地図そのものについての投影法，したがって使用した地

6）「費用録」（1851）『全集第9巻』

7）「清国感豊乱記」（1855）『全集第2巻』

図の特性などについてどの程度の知識をもち，考慮を払っていたかなどもわからない。

実地における観察のし方，あるいは聴取の方法と態度などについては，既にふれたことでありここでは省略する。

4.　教育における地理学と地図

くりかえすまでもなく「離地而無人……」の詩句は，「初め重輔首（しゆ）として学を為すの方法を問う」に対する松陰の答であって，地理学を人事百般を論ずる基礎学として重視しているものである。天野御民の「松下村塾零話」[8] に「先生の歴史を読まるるには常に地図に照合し，古今の沿革彼我の遠近を詳かにす。依って地理に精通せり。つねに曰く『地を離れて人なく，人を離れて事なし，人事を究めんと欲せば，先ず地理を見よ』と」の記述がある。また品川弥二郎も「先生は何を主として教えられたかというに，地理・算術・歴史を主として何時も塾生にやかましくいわれたものである」と語り，同じく金子重輔に与えた「地を離れて……」などを述べたあと，「また余が先生に支那の歴史を学ぶ時にも，唐土沿革誌を某氏より借り受け，歴史をあわせ調べさせられたなど，先生が地理に重きをおかれたことがわかろう」また「其頃先生は支那の地誌に就て不審ある毎に弥次に聞いて見よ，弥次が知らねば分るまいといわれた事もありましたが，余は先生よりいつも地誌でいじめらるるを以て実に閉口したり」[9] というように述懐している。

ともにしばしば取りあげられてきた松下村塾における松陰の教育ぶりを物語る貴重な記録である。松陰がその教育において地理学を重視し，坤輿図識などの地理書を講じているのはもちろん，明倫館の山鹿流兵学師範妻木士保に「さてまた輿地の学，後進生御誘掖専務と存じ奉り候。坤輿図識一部にても精読すれば其の益少なからず」[10]という書簡を送ったりもしている。

また，地理の教育に地図の使用を必須のこととし，しかも地理の背景として

注8）　天野御民「松下村塾零話」（1897）『全集第10巻』

9）　「日本及日本人」（1908）吉田松陰号　政教社発行　多くの論著に引用されているが注の4）・6）によった。

10）　「妻木士保宛書簡」（1855）『全集第7巻』

の歴史を，また歴史の舞台としての地理を共に重視するという優れた教育をしたことが推察できるのである。この意味において松陰は賢明で有能な地理教育家であったといい得るであろう。

Ⅵ　おわりに

吉田松陰の地理学が，その30年の生涯を通じて，実学としての兵用地理学的地政学的展開をした様相を検討し，松陰における地理学研究の目的と方法，地理学観，教育への活用を要約したのであるが，不十分な松陰の地理学の研究序説であり，未熟な管見にすぎないものである。

吉田松陰像自体が，時代によって，また諸家によって多様であり，その間の偏差も大きい。地理学サイドからみた松陰像もまた，当然そうした傾向をまぬがれがたい。松陰の全人間像の中で，しかも生涯を通じての形成発展の相においてなるべく客観的に考察するため，地理学関係以外の先学の著作をも参照させていただいた。しかし松陰における地理学的側面を特に抽出して論じたものが極めて少なく，意外の感を抱いたのである。ともあれ，印象的であり，感銘を強くうけたのは，伝記や研究書などではなく対談を中心とするものであるが司馬遼太郎・橋川文三他の『吉田松陰を語る』[1] であった。奈良本辰也・河上徹太郎・松本三之介・桑原武夫・保田与重郎・海音寺潮五郎の諸氏の参加したものであるが，終りに加えられた田中彰の「明治・大正・昭和の松陰像」という展望は卓越した文章で示唆されるものが多かった。また，徳富蘇峯[2] はじめ玖村敏雄[3]，奈良本辰也[4] その他の『吉田松陰』も読み直し，あらためて松陰の人間性や偉大さなどを味わうことができた。その他を含め，多数の著作者各位に敬意を表さねばならない。

注１）　司馬遼太郎・橋川文三他（1974）『吉田松陰を語る』　大和書房
　２）　徳富猪一郎（1893）『吉田松陰』　民友社
　３）　玖村敏雄（1936）『吉田松陰』　岩波書店
　４）　奈良本辰也（1951）『吉田松陰』　岩波新書55

地理の研究と教育に，我が歩む道を決し，吉田松陰の地理学に関心をもって既に久しい。塾教育を重んじ，松下村塾の教育に学ぶことの多かった玉川学園[5]から，「松陰先生の山口県」にくるようになり[6]，時に松陰の地理学について話し，また小文を綴りもした[7]。また，先きの名著吉田松陰の著者，岩波版全集の編集者玖村敏雄教授に，萩の松下村塾や野山獄跡などの案内もうけた[8]。こうした思い出や感銘が，このたびの執筆を促しもした。その上，松陰の地防長に生をうけられ，格別松陰に明るい本学の山中鉄三教授と脇英夫教授からは，貴重な文献を拝借したし，陰に陽にあたたかい声援をもいただいた。なお，本学松陰会の研究会[9]では，「吉田松陰の地理学観」の発表の機会が与えられ，討議を通じて多くの啓蒙をうけることができた。

恥入るほかないこの小文さえ，以上のような経過と，多くの先学と諸友の支援のもとに生れたものである。深い感謝の誠をささげる。

注5）　東京都町田市の玉川学園，1929年小原国芳園長がはじめた全人教育一塾教育と労作教育をめざした新教育の学園。

6）　1939年，秋吉台など石灰岩地域の地理研究を胸にひめて来任したが，松陰先生への関心ともかかわっていた。

7）　1942年，光市教員総会で「吉田松陰の地理思想」講演。1955年「山口大学通信教育第13」号に「地理の学修一松陰に学ぶもの」掲載など。

8）　1958年，矢内原忠雄東京大学総長を，玖村教授と共に秋吉台と萩に案内した時の「日本一の案内という玖村先生の，具体的で精詳，情熱あふれる名解説」

9）　1980年創立の徳山大学松陰会の，1981年5月の研究会。

（1981，6，28）